

■ポイント

この寝取られ小説は、夫のことを心から愛している保育士の若妻が、隣に引っ越してきた隣人の半グレに寝取られ、体も心も奪われ孕まされるまでの過程を長編小説として描いています。

■あらすじ

田中良助と田中南は、結婚して3年目の新婚夫婦。

周りから見ても、羨ましがられるほど仲が良い相思相愛の夫婦だった。

マイホームを購入することを夢見て、今は夫婦でアパートで幸せに暮らしている。

そんな幸せな夫婦の隣の空き部屋に、一人の男が引っ越してきたことから、二人の幸せな日常は徐々に狂い始めていく。

その男は、整った顔立ちと知的な雰囲気、良助と同年の男性。

会社経営者の肩書を持っており、経済的にも成功しているその男には、その風貌から予想できない裏の顔がある。

その男は、犯罪組織を統括する立場にあり、裏社会に属している半グレと呼ばれる存在であった。

そして、二人の幸せな生活に、この半グレの男は巧みに浸食していく。

この知的でやり手の半グレの男に気に入られたことにより、心から夫のことを愛している保育士の人妻は塗り替えられていく。

夫への愛すらも、上書きされ寝取られていく人妻の姿を、背徳感を重視して描いています。

背徳感、焦燥感、ストーリー性を重視する方におすすめの内容に仕上げました。

※ストーリーと背徳感を強めて寝取られ感を出すことを重視して執筆したため、寝取られに入るまでの過程を長くしています。

サクサクっと短編の寝取られ小説を楽しみたい方よりも、ストーリー性と背徳感重視の長編寝取られ小説を楽しみたい方向けの作品です。

主要登場人物

田中良助 （夫 工場勤務）

田中南 （妻 保育士）

樺沢蓮司 （半グレ）

田崎勉 （同じマンションに住む良助の先輩）

目次

- 第1話 『狂い始める夫婦の日常』
- 第2話 『半グレに奪われた人妻の唇』
- 第3話 『浸食される夫婦の絆』
- 第4話 『半グレに汚される人妻の体』
- 第5話 『堕ちる人妻の心』
- 第6話 『寝室で半グレの精液を受け入れた人妻』
- 第7話 『隣人の半グレに孕まされる人妻』

第1話 『狂い始める夫婦の日常』

田中良助と田中南は、結婚3年目のまだ20代の若い夫婦。

夫である田中良助は、工場の作業員として働いている27歳。

妻である田中南は、保育士をしながら、同時に家事もこなし日々夫である良助のことを支える27歳。

二人の出会いは、通っていた高校で同じクラスになったことがキッカケであった。

大人しい性格の良助は、クラスでも目立たないグループに所属している、どこにでもいるような普通の生徒。

外見も身長も成績も、全てが平均的で、悪い言い方をすると長所が無いタイプの生徒であった。

逆に南は、恵まれた容姿と生まれ持った明るい性格で、友達も多く学年のマドンナ的な存在であった。

パッチリとした二重の大きな目と男性の視線を奪うような大きなEカップのバスト。

身長は160cmで細身というモデル顔負けの恵まれた体型。

街を歩けば、芸能関係のスカウトから必ず声を掛けられるほどであった。

高校生徒は思えない洗礼された美貌の持ち主だったため、南は当時から多数の男子からアプローチを受ける。

しかし、元々男性に興味がまったくなかった南は、自分のことを口説く全ての男をシャットアウトしていた。

そんな真逆のタイプの良助と南は、席が隣になったことがキッカで関係が始まる。

当時から南のことを狙う男性は多く、偶然にも席が隣になった良助は僻みの対象にされてしまう。

運が悪いこと、良助と南のクラスには、学校で一番悪と有名な不良生徒が在籍していた。

その男は、現役の高校生でありながら、地元の暴走族を仕切るほどの人物である。

高校生でありながら、すでにヤクザの事務所にも出入りしているとの噂も広まっていた。

父親は地元でも有名な成金であり、複数の会社を経営している権力者。

社会的に成功しているが、裏ではヤクザと繋がりががあると噂され周辺住人からは恐れられている。

そして、その遺伝子を引き継いでいるためか、その男の息子は不良の世界では名が売れていた。

女好きとしても有名で、同じ学校の女子生徒は何人も被害にあっている。

独占欲と支配欲が強く、自分が気に入った女性は、強引な手を使っても自分の彼女にしていた。

気に入った女性に交際している彼氏がいても、この男はまったく気にすることもない。

不良仲間を使い、気に入った女性の彼氏を脅し、無理やり別れさせて自分の女にして奪う。

高校生ながら、狡猾さと女性を口説き堕とす力は、そこら辺の大人よりも遥かに優れていた。

学校の中でもマドンナ的な存在の南のことを、この男が放っておくわけがない。

当然、この男は南のことを何回も何回も口説き続けていた。

同じクラスということもあり、ほぼ毎日のように、南にしつこく話しかけては口説き続ける。

しかし、南は何回アプローチを受けても、この男のことをまったく相手にしない。

真面目な性格の南は、不良のことを心から嫌っていた。

そして、それだけではなく、女性に対して軽薄な男性のことを毛嫌いしている。

学校で一番の不良であり、さらに女性好きで軽薄な、この男のことを南は生理的にも精神的にも拒絶していた。

全面的に態度に出し、何回口説かれても決して相手にすることはなかった。

その鬱憤は、南の隣の席を偶然にもゲットしてしまった良助に向けられことになる。

大人しく地味な性格の良助は、女性に対して興味がまったくなかった。

この当時の良助が熱中していたものは、都市伝説などのいわゆるオカルトジャンル。

良助は、学校には非公式でオカルト研究会という名前のサービスを立ち上げるほど熱中していた。

非公式のサークルだが、放課後に同じように都市伝説に興味がある生徒を集め活動していた良助。

そのため、良助の席には自然とサークルのメンバーや都市伝説好きな生徒が集まっている。

隣の席の南は、良助やサークルメンバーの話を、聞き耳を立てて聞いていた。

実は、その外見からは想像できないほど都市伝説やオカルト系のファンだった南。

しかし、良助達の会話に入ることができず、隣で聞き耳を立てて会話を盗み聞きするように楽しむ日々が続いた。

毎日、良助の席にはサークルのメンバーが訪れ、南をワクワクさせるような都市伝説の情報が飛び交う。

ある日、我慢できなくなった南は、良助達の会話に自分から飛び込んだ。

一瞬、楽しそう都市伝説の話をしていた良助とサークルメンバー達は、会話を止めて沈黙する。

それは、考えてみれば当たり前の反応であった。

良助と周りにいたサークルメンバーは、言い方を悪くすると地味で女性とは縁のない生活を送る地味で大人しい男子生徒。

対照的に、南は学校内でマドンナ的な存在。

自分達とは、真逆な属性の南が突然自分達に話しかけてくるなんてあり得ないことだった。

「あ・・・ごめんなさい。急に話しかけちゃって。私も都市伝説が好きだからつい・・・」

良助達の反応に、南は申し訳なさそうに謝ってしまう。

良助とサークルのメンバーは、信じられないような表情をして顔を見合わせる。

「いや・・・全然大丈夫だよ。ただ、南さんが都市伝説に興味があるなんてちょっと以外だったから、ビックリしちゃったよ。」

良助は、少し照れくさそうに話していた。

大人しく地味な良助は、女性との交際経験もなければ、まともに会話をしたことすらない初心な学生。

学内でマドンナ的存在の南と普通に話すだけでも、緊張で胸の鼓動が高鳴っていた。

これがキッカケになり、良助と南は、都市伝説について頻繁に話すようになっていく。

席が隣同士ということもあり、休憩時間になると、お互いが知っている都市伝説について話し合った。

そして、自然な形で南も良助が立ち会上げた非公式のサークルにも顔を出すようになる。

休憩時間だけでなく、放課後にも集まり、都市伝説について時間が忘れるくらい夢中になり語った。

そんな関係が半年以上も続くと、クラスの間である噂が広がりだす。

良助と南は付き合っているのではないか？

学校内で噂になるほど、二人の関係は親密に見られていた。

実際には二人は男女の関係ではなく、ただの同じ趣味を共有する関係にすぎない。

しかし、そんな二人の関係を大きく変える日が訪れる。

その日、良助と南は、いつものように都市伝説の話をしていた。

楽しそうに話をしている二人の元に、ある男が偉そうな態度で現れる。

学内で1番の不良生徒であり、度々玲奈のことを口説く、女好きなあの不良生徒だ。

「楽しそうな話してるじゃん。俺も話に混ぜてくれよ？」

その男は、遠慮することもなく、近くの他の生徒の席に座り込む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気が弱い良助は、その不良生徒の圧力に完全に委縮して黙っている。

そんな良助のことを、ギラギラとした鋭い目で睨みつける不良生徒。

「そこの席は、あなたの席じゃないでしょ。それに、馴れ馴れしく私たちの会話に入ってこないで。」

良助とは違い、気が強い南は、不良生徒に臆することなく言い放つ。

先ほどのように楽しそうな表情はせず、冷たい目で不良生徒のことを見ている。

その目は、まるで汚物を見るような嫌悪感に満ちた目だった。

「そんなに冷たくしないでくれよ。俺はただ南ちゃんと仲良くなりたいただけなんだからさ。」

嫌悪感をむき出しにする南に対して、一歩も引くことなく遠慮なく話しかける不良学生。

普通の男であれば、気後れして会話はとっくに終わっているだろう。

だが、この不良生徒はそんな繊細な男ではない。

気に入った女生徒を、どんな卑怯な手を使っても、片っ端から口説き堕として肉体関係まで発展させる。

高校生ながら、経験人数はすでに3桁を超えており、普通の大人よりも女を口説き堕とすテクニックを持っていた。

南のように、自分のことを生理的に拒絶して、蔑むような目で見てくる女性は、今まで腐るほどいた。

そんな女性を体も心も堕として、自分の女にすることへの快感を、高校生ながらにしてこの不良学生は知っていた。

「私は、あなたみたいな女好きの不良が大嫌いなの。だから、もう話しかけないで。」

南は、良助と喋っている時とは別人のような口調と表情で不良学生にキツイ言葉を浴びせる。

普段とは別人のような南を、良助は隣の席で何も言わずに傍観している。

「あ？なんだよその言い方。俺が誰だかわかってそんな口聞いているのかよ？優しくしてや
ってるからって、あんまり調子に乗るなよ。」

南の言動と態度に不良学生は怒りた、態度を豹変させた。

その不良学生の様子に、南は体をビクンとさせ怯えたように表情を曇らせる。

そんな南と不良学生の様子を、何もできずに傍観することしかできない良助。

「おい何黙ってるんだよ？何か言えよ。」

ガシャッ

機嫌を悪くした不良学生は、席を立つと、怒りに任せて椅子を蹴り上げた。

「きゃっ！」

不良学生は、怯える南の前に立つと、ニヤッと不敵な笑みを浮かべる。

まるで、自分に怯えて大人しくなった南の姿を楽しんでいるようだった。

「悪かったよ南ちゃん。俺はただ南ちゃんと楽しく話したいだけだからさ。ごめんな。」

先ほどとは、別人のような口調と表情で優しく南に話しかける不良学生。

怯える南の肩に手を乗せ、馴れ馴れしく体を触っていた。

南は、怯えた様子で、体を小刻みに震わせている。

強がってはいても、南はまだ年頃の女の子。

目の前にいるのは、ただの不良ではなく、地元でも最も有名な不良の中の不良。

その不良に目の前で威圧的な態度を取られれば普通の女性であれば南の反応なるのは当然だった。

周りにいる他のクラスメイトも、その光景を見て見ぬふりをしている。

不良生徒からの報復を恐れて、誰も何も言えない状況であった。

そんな状況の中で、最も意外な人物が声を上げる。

「もう止めなよ。南さんも嫌がってるでしょ。その手も離しなよ。」

その声の主は、なんと隣の席に座っている良助であった。

その光景を見ていた誰もが、自分の目を疑っている。

あの地味で大人しく誰よりも気が弱い性格の良助が、誰からも恐れられている地元で一番の悪である不良生徒に意見していた。

南に横暴な態度を取る不良学生に対する怒りで別人のような表情になっている良助。

「良助君・・・・・・・・」

自分のことを助けようと勇気を出して不良学生に立ち向かう良助のことを見つめる南。

他のクラスメイトは、全員が固唾を飲んで見守っている。

「あ？なんだよお前。俺の文句あるのかよ？」

自分に立ち向かおうとする良助のことを、威嚇するように睨みつける不良学生。

とても高校生徒は思えないナイフのように鋭い視線だった。

「だから・・・南さんから離れろよ？誰がどう見ても南さんは君に話しかけられることを嫌がってるだろ。」

良助は、限界以上に勇気を振り絞っている。

その証拠に、この時の良助の手と足は、不良学生への恐怖心からプルプルと震えていた。

「お前いい度胸してんじゃーか。そんなヒョロイ体したオタク野郎のくせによ。ちょっと外に出ろよ」

そう言うと、不良学生は良助のことを無理やり教室の外に連れ出してしまう。

細身な体の良助とは違い、不良学生は身長は180cm以上。

鍛えているのかアスリートのように筋肉で覆われた逞しい体をしていた。

そんな不良学生の力に、貧弱な良助が敵うわけもない。

教室の外に力づくで連れて行かれると、他の生徒がいる前で公開処刑のようにボコボコに殴られた。

「オラっ！小生意気に俺に逆らいやがって。南の前でいい恰好しよとしてんじゃねーよ。」

自分に歯向かった良助のことを、不良学生は必要以上に殴り続ける。

しかし、それは自分に対して反抗的な態度を取ったことだけが原因ではない。

普段から南と楽しそうに話している良助のことが、以前から気に入らなかった。

「・・・痛い・・・もうやめて・・・」

良助は、何もできずに不良学生から一方的に暴行を受けるしかできなかった。

「こらっ！何しているんだお前。やめろっ！」

騒ぎを聞きつけた教員が、慌てた様子で二人の元に走ってくる。

「ちっ。邪魔が入りやがった。今日はこれくらいにしてやる。次に俺に齒向かってくるなら、とことんやってるからな？」

そう言い残すと、不良生徒はその場を去り教室の中に戻っていった。

「おいお前大丈夫か？血が出てるじゃないか。一緒に保健室に行こう。」

激しい暴行を受けたことで、唇と頬から血を流している良助。

教員に抱えられながら、保健室に向かった。

保健室のベットの中で、圧倒的な敗北感と自分の情けなさに良助は深く落ち込んでいる。

1時間ほど、保健室のベットで休んでいると、良助の元に南がやってきた。

「良助君大丈夫？さっきは、私のこと守ってくれて本当にありがとう。」

南は泣きそうになりながら、良助へ感謝の気持ちを伝えている。

不良学生に激しい暴行を受けたキカッケが、自分であると考えていた南は良助に謝り続けた。

「気にしないで。僕が勝手に出しゃばっただけだから。南さんは何も悪くないよ。」

優しい性格の良助は、自分に責任を感じて謝り続ける南に対して優しい言葉を投げかける。

「でも・・・私があいつに余計なことと言って怒らせなければ、良助君が怪我することになったのに・・・本当にごめんなさい。」

南は、綺麗な二重の大きな目から涙をポロポロと流しながら良助に謝罪し続けた。

「泣かないで南さん。俺は本当に大丈夫だから。悪いのは南さんじゃなくて、あの不良だから。」

そう言うと、良助はポケットからハンカチを取り出して、優しく南の涙を拭いた。

「良助君・・・ありがとう。良助君って本当に優しいんだね。勇気出して話しかけてよかった。」

南は、少し照れるように良助に自分の素直な気持ちを伝える。

「当たり前のことをしただけだから・・・でも、南さんに何もなくて本当に良かったよ。」

良助も少し照れながら笑った。

南は、そんな良助の優しそうな笑顔を、他の男性に向ける視線とは違う目で見つめていた。

その日から、良助と南の関係は徐々に変化していく。

積極的に南から良助に話しかけることが多くなっていた。

お互いの共通の趣味である都市伝説の話だけでなく、他愛もない雑談もするようになっていく。

南にしつこく話しかけ口説いていた不良学生は、良助への暴行がキッカケになり退学処分になった。

今まで通り、放課後は非公式の都市伝説サークルで集まり、お互いの趣味を楽しみ合う。

偶然にも、自宅の方向が一緒だったこともあり、当たり前のように南と良助は一緒に帰ることが多くなる。

ほぼ毎日のように会話をし、誰よりも同じ時間を共有していた。

気が付くと、男性や恋愛にまったく興味がなかった南は、良助のことを恋愛対象として見るようになる。

そして、それは良助も同じだった。

お互いを異性として意識し合っていた二人は、微妙な関係のまま数か月が経過した。

季節は冬になり、春に近づいていく。

高校1年生から進級して2年生へ、そしてクラス替えの季節が迫っている。

クラスが変われば、離れ離れになってしまうかもしれない。

そのことを、良助も南もお互い強く意識していた。

春休み前の終業式の帰り、いつものように良助と南は一緒に帰っていた。

「ねえ、まだ時間大丈夫？ちょっと公園に寄って行かない？」

いつものように雑談をしながら歩いていると、ふと南が良助を通り道にある公園に誘った。

「え？別にいいけど・・・どうしたの急に？」

普段と少し様子が違う南の様子に戸惑う良助。

公園に到着すると、二人は公園の中にあるベンチに座る。

南は、ソワソワしながら良助に何かを言いたそうにしていた。

恋愛経験も女性経験も全くない良助は、この時に南が何を考えているのかまったく理解できていない。

しばらくの間、二人は無言でベンチに座っていた。

「あのさ・・・ちょっと大事な話があるんだけど・・・」

沈黙を破る様に、南が口を開く。

「大事な話？ どうしたの？ 何かあったの？」

鈍い良助は、南の身に何か起こったのか本気で心配して聞き返した。

「あのさ・・・良助って私のことどう思ってる？」

南は、いつもとは違う真剣は表情で良助に質問する。

「南のこと？・・・うーん・・・なんでそんなこと急に聞くの？ なんか変だよ。今日の南。」

鈍い良助でも気づくほどに、この時の南は、いつもの様子が違っていた。

質問を質問で返すような返答する良助に南は少し戸惑う。

普通の女性なら、それが当たり前の反応だった。

どんなに鈍い男でも、この状況で南の態度を見れば、普通は気づくはず。

しかし、良助の鈍さと女心への理解度は、常軌を逸しているレベルで低い。

「・・・じゃあ、正直に言うよ。私、良助のこと好きになっちゃった。私と付き合ってください。」

南は、少し力む様に大きな声で良助に自分の気持ちを伝えた。

自分の気持ちを素直に伝えると、南は顔を真っ赤にしながら、下を向いて俯いた。

「・・・・・・・・」

南の言葉を聞いた良助は、自分が夢を見ているのではないかと思い、頬を自分で抓った。

そして、これが夢ではなく現実であることを確認しすると、信じられない表情をしている。

「本当に？俺のこと揶揄ってるんじゃないよね？」

女心をまったく理解していない良助らしいリアクションだった。

「・・・本当に決まってるじゃん。こんなこと冗談で言うわけないでしょ。」

南は、恥ずかしさからかなのか、まともに良助の顔を見ることができない。

隣に座っている良助が、信じられないほどの歓喜の表情を浮かべているとは知らずに。

「嬉しいけど・・・本当に俺なんかでいいの？南だったら、もっと俺なんかよりもカッコいい男と簡単に付き合えるのに。」

自分に自信のない良助らしい返答だった。

女心がわかっていて、自分に自信がある男性なら、南のような美人に告白されてたら二つ返事です承するだろう。

しかし、南はそんな良助の不器用なほど謙虚で純粋な性格が大好きだった。

「・・・良助じゃないとだめなの。他の男なんて興味ないし。良助は、私じゃ嫌？」

南は、顔を上げると、大きく綺麗な目で良助のことを真っすぐ見つめながら質問した。

「嫌じゃないよ。俺も・・・その・・・南のこと気になってたし・・・俺なんかで良ければ・・・よろしくお願いします。」

良助は、未だに信じられないような顔をしながら南の告白を受け入れた。

南は、大きな目から涙を零して泣いていた。

「えっ？！どうしたの南？泣かないでよ。俺も泣きそうになるじゃん。」

良助は、ポケットに入れていたハンカチで、少し慌てながら南の涙を優しく拭った。

しばらくの間、二人は何も喋らずに沈黙してしまう。

その沈黙を破る様に、南が口を開く。

「良助・・・ありがとう・・・大好き・・・」

自分の気持ちを良助に伝えたと、良助の頬にキスをする。

唇が触れる程度の優しいキスだった。

それから、南と良助は正式に恋人になり交際をスタートさせる。

付き合い始めた当初は、周りは二人はすぐに別れると思っていた。

学内のアイドル的な存在の南と大人しく地味でひ弱な良助は、どう考えても釣り合わない。

まさに月と鰐のような関係であった。

しかし、周りの予想とは反対に二人の交際は順調に続く。

そして、一度も別れ話や喧嘩もなく、約8年の交際期間を経て、二人は24歳の時に結婚する。

結婚を決めたキッカケは、南からの逆プロポーズであった。

子供ができたわけではなく、何か特別なタイミングがあったわけでもない。

ただ、8年間の交際の中で見てきた良助の優しさや真面目で真摯な性格が南を決断させた。

この人とこの先も一緒に人生を歩んでいきたいと。

学生の頃からまったく変わらない性格の良助は、南の逆プロポーズを大喜びしながら受け入れた。

お互いの両親への挨拶や結婚式など人生の一大イベントを済ませ、二人は無事に結婚した。

マイホームの購入資金を貯めるために、今はまだファミリー向けの賃貸マンションを借りて暮らしている。

まだ二人は子宝に恵まれていないため、良助と南だけで住むには、十分すぎる広さだ。

子供は、30代に入る前に作りたいと二人で話していて、日々子作りに奮闘している。

結婚してから3年が経過したが、二人の気持ちは変わることなく、お互いを思い合い愛し合っている。

金銭的には、余裕があるわけではないが、良助も南も幸せを噛みしめながら日々生活していた。

あの男が目の前に現れるまでは・・・・・・・・

ある日、朝から隣の空き部屋に引っ越し業者が出入りしていた。

良助と南が住んでいるマンションは、ファミリー向けだが、独身者も多く住んでいる。

そのため、人の出入りが激しく、隣の部屋は空き部屋になっていた。

「隣の空き部屋、誰か新しい人が入るみたいだね。今日とか引っ越し業者が出入りしてたよ。」

その日の夜、仕事を終えて帰宅した良助と南は、いつものように一緒に夕食を食べていた。

良助は、工場勤めの為、日勤と夜勤がある交代制の勤務形態。

保育士をしている南は、ほぼ決まった時間で朝の8時から17時過ぎには自宅に帰ってこれる勤務形態だった。

2人の決め事で、良助が日勤の時は、必ず二人で一緒に夕食を食べると決めている。

少しでも多く、夫婦の時間を作ろうとする二人なりの努力だった。

「そうなんだ。新しい住人はどんな人だろ。変な人じゃなければいいけどね。あ・・これ美味しいな。」

心配性な良助は、南の手料理を味わいながら新しい住人がどんな人間なのか気になっている様子だった。

「前住んでた人は、ちょっと変わってた人だったもんね。まだ住んでないみたいだけど、仲良くできるといいね。」

以前、隣に住んでいた男性は、独身者の男性であったが、不審な点が多い人物だった。

すれ違う度に、南のことをジロジロと観察するようにイヤらしい目で見てきた。

幸いなことに、その男性は入居してから、わずか4ヶ月間程度で退去する。

元々男性に対して警戒心が強い南は、その経験もあり新しく入居する住民がどんな人物であるのか不安を感じていた。

「そうだね。まあ、隣に住んでるって言うても、滅多に会うこともないから、そんなに気にする必要もないんじゃない。」

能天気な良助らしい発言だった。

「そうけどさ。まあ、何かあっても良助に守ってもらうから心配いらないか。」

南は、少し照れるような仕草を見せる。

「うん。俺が南のことちゃんと守るから安心してよ。頼りないかもしれないけどね。」

良助は、自分が頼りがいのあるタイプの男性ではないと自覚していた。

身長は168cmと平均よりも低く、体格もガリガリで細い。

性格も勝気な性格というよりも、他人と争いごとを好まない非好戦的な性格。

学生時代から気が弱い性格も克服できていない。

そして、何よりも良助は、未だに自分に対して自信を持つことができていなかった。

収入も平均以下、外見も地味でパツとしない、特技や長所があるわけでもない。

強いて言うなら、良助が唯一誰にも負けない自信があることは、南のことを愛する気持ちだけだった。

「ありがとう。良助は頼りないかもしれないけど、私のこと一番愛してくれるもん。だから私は良助と一緒に居てくれるだけで安心できるよ。」

南は、少し顔を赤くして恥ずかしそうにしている。

良助は、そんな南のことを見て、自分が今幸せであることを改めて実感する。

その日の夜、二人は寝室のベッドで体を重ね、お互いの気持ちを確認し合おうように愛し合っていた。

「ん・・・良助・・・大好きだよ・・・良助・・・」

正常位の体勢で、南と良助は繋がっている。

良助も南もお互い初めて同士だったため、今でもセックスという行為に対しては、他の男女と比較しても明らかに消極的。

二人は性欲も弱い方で、初めて体を重ねたのも付き合ってから3年が経過してからであった。

同じような年頃のカップルと比較しても、あり得ないほどの純愛を貫いてきた。

そのためなのか、結婚した今でも、二人はセックスという行為に対して、積極的になれない。

二人にとってセックスは、お互いの愛を確かめ合うための行為という認識であった。

セックスに対する快楽など、二人は一切求めていなかった。

「ああ・・南・・好きだよ・・はあ・・はあ・・ごめん・・もうイキそう・・」

正常位で挿入してからすぐに、良助は絶頂に達しようとしてしまう。

「ん・・いいよ・・良助・・ん・・良助・・」

南は、絶頂に達しようとする良助に甘えるようにしがみつく。

「はあ・・はあ・・南・・好きだよ・・ああ・・出る・・」

小動物のように弱弱しく小刻みに腰を振る良助。

絶頂を迎え、震えるような声を出しながら、南の中に精液を放出する。

「ん・・良助・・好き・・良助・・ん・・」

南は、良助に抱きつきながら、幸せの余韻に浸っていた。

「はぁ・・はぁ・・ごめんねみなみ。いつも俺ばかり気持ち良くなって。」

二人のセックスは、いつもこのように良助が一方的に絶頂に達して完了する。

自分だけ満足して南のことを満足させていないことには、良助自身も気づいている。

ただ、女性経験が南しかない良助にとって、女性のことを満足させる術を良助は知らない。

インターネットやアダルト動画で得た知識だけが頼りだった。

二人の行為は、基本的に正常位のみで、良助が南の体を雑に愛撫する程度。

男性経験が人並みにある女性なら、良助の自分勝手なセックスに怒るかもしれない。

しかし、男性経験が良助しかない南にとっては、このセックスが当たり前であり、何も不満に感じていない。

ただ、良助と体を重ね、愛し合っていることを実感できるだけで満足だった。

南は性的な快楽など求めてもいないし、必要としていない。

この時は・・・・・

行為を終えた二人は、ベットの中で抱き合っている。

南が甘えるように良助の細い体に抱きつき、眠りにつくのが行為の後のいつもの流れであった。

良助も愛おしそうに自分に甘える南のことを抱きしめる。

この幸せが、いつまでも続くと良助は信じている。

自分の目の前から南がいなくなる未来が来るなんて、この時の良助は考えもしていなかった・・・

次の日も、引っ越し業者により隣の空き部屋に大量の荷物が運ばれていた。

この日は、良助はシフトの関係上、深夜勤務で昼間は自宅にいた。

隣の部屋に荷物を運ぶ音がするため、気になり外に出てチラチラと確認する良助。

運ばれている荷物の量から、良助は勝手に独身者ではなく既婚者であると思い込んでいた。

それから数日が経過したある日、良助と南の元に同じマンションに住んでいる仲の良い住人の田崎という男性が訪ねてくる。

その日は、日曜日で良助も南も仕事は休みだった。

田崎は、良助が勤めている会社の先輩であった。

その男性は、既婚者であり良助夫婦とは、家族ぐるみの付き合いがあるほど仲が良い。

「ごめんな。休みの日に。これさ、俺の実家から送られてきた野菜なんだけど、良かったら使ってよ。」

田崎は、実家が農家で定期的に米や野菜を良助夫婦に分け与えてくれた。

良助のにとっては、田崎は会社の先輩であり、他の先輩よりも仲が良く可愛がってもらっている。

マンション選びに悩んでいる良助に、このマンションを紹介してくれたのも田崎であった。

「いつも本当にありがとうございます。助かります。ここじゃなんだから、良かったら中に入ってください。」

良助は、田崎のことを自分の部屋の中に招き入れた。

「じゃあ、少しだけお邪魔しようかな。せっかくの休日に夫婦水入らずのところを悪いね。」

田崎を自宅に招き入れると、茶菓子を出していつものように雑談を楽しむ良助。

少しすると、南も会話に加わった。

話の話題は、職場の上司の愚痴や噂話が中心で、いつもと会話の内容は、あまり変わらない。

そんな時、隣の空き部屋に引っ越し業者が荷物を運ぶ音が聞こえてくる。

「そう言えばさ、最近あの空き部屋に荷物が運ばれてるけど、田崎先輩何か知ってますか？」

何気なく田崎に質問する良助。

「ああ。あの部屋ね。確か、新しくあの部屋に入るのは独身の男だったはず。年齢は多分、良助と同じくらいだったかな。」

情報通の田崎は、すでに隣の空き部屋に入居してくる住人の情報を得ていた。

田崎は、このマンションの大家とも仲が良い。

そのため、新しい住人が入るたびに、定期的に大家から情報を得ていた。

「へえ。俺と同年くらいの男性なんですか。どんな人だろ？仲良くできるといいな。」

何気なく良助が言った一言に田崎が反応する。

「あんまり仲良くしない方がいいかもな。俺も本人とあったことがないから、こんなこと言うのもよくないけど・・・」

「え？なんでですか？新しい住人のこと何か聞いているんですか？」

田崎の一言に、良助は過剰に反応した。

「まァ、俺もそこまで詳しくは知らないんだけどさ。もしかしたら、反社会勢力の人間かもしれないってさ」

反社会的勢力とは、ヤクザのように組には所属していない人間のことを指す。

暴力や威力、または詐欺的手法を駆使しながら不当に利益を搾取するのが特徴である。

個人で行動する者もいれば、組織に所属して行動する者も存在する。

「ええ？反社会勢力って怖い人達のことですよ？そんな人が隣に引っ越してくるんですか？」

気が弱い良助は、田崎の話を聞いて、本気で驚き怯えている。

「あくまで大家の話だからな。でも、独身で良助と同じ年くらいの男性ってことは確実に。仲良くできるといいな。」

田崎は、怯える良助のことを見ながら、少し揶揄うように言った。

隣に座って二人の話を聞いている南も不安な表情をしている。

「マジかよ。そんな人が隣に引っ越してくるのか。嫌だなあ。その話が本当なら注意しないとな。」

良助は、田崎の話を聞いて憂鬱そうな表情を浮かべている。

「まあ、そんなに心配することないって。その話が本当だとしても、普通に生活してれば被害に合うことなんてないだろ。」

田崎は、他人事のように能天気話す。

しかし、話を聞いていた南はなぜか言いようのないほどの胸騒ぎと嫌な予感がしていた。

それから、1時間程度ほど雑談を楽しむと、田崎は帰っていった。

「田崎先輩の話って本当なのかな？隣に反社会勢力の人間が住むなんて嫌だな。」

良助は、すでに田崎の話を信じ込み不安そうな表情をしている。

「そうだね。そんな人が隣人になるなんて嫌だな。まあ、何かされても良助が守ってくれるから、そこまで心配してないけど。」

南は少し照れ笑いを浮かべながら、良助に甘えるように言った。

「うん。怖い人は苦手だけど、南に何かあったら、俺が命に代えても絶対に守るから安心して。」

普段は、気が弱く頼りない良助だが、南の前だけでは、頼りがいのある男性を意識して発言している。

本当は、良助自身も言いようのない不安に包まれていた。

それから数日間は、特に何も大きな変化はなく普段通りに生活する良助と南。

隣の空き部屋も、荷物を運びきられたのか、引っ越し業者の出入りも、物音もまったくしなくなった。

そして、その週の休日の日、その出会いは突然訪れる。

この出会いにより、良助と南の関係は大きく狂い始める。

ピンポン　ピンポン　ピンポン

インターホンの音が良助と南の部屋に鳴り響く。

良助と南は、部屋で一緒に気になっていた映画を観て楽しんでいた。

「ん？誰だろ？田崎さんかな？」

いつものように田崎が遊びに来たのかと思い、扉をあける良太。

そこに立っていたのは、田崎ではなく、身長185cm前後の筋肉質な大柄な男性だった。

その男の名前は樺沢蓮司。

大柄だが、整った顔立ちと知的な雰囲気のを漂わせている。

知的な雰囲気を漂わせてはいるが、相手のことを威嚇するような威圧的な雰囲気も兼ね備えていた。

「初めまして。今日から隣に越してきた樺沢と申します。今日は、ご挨拶にきました。」

声は男性らしく低く、大きくハキハキとしていた。

その声の大きさに良助は、一瞬驚き体をビクンとさせてしまう。

「初めまして。田中と申します。こちらこそ、宜しくお願いします。」

樺沢蓮司が放つ威圧感と特殊な雰囲気に驚きながらも、良助も真似ないように大きな声で挨拶をした。

「あれ？・・・」

樺沢蓮司は、良助のことを見て、何かを思い出そうとしているような素振りを見せる。

「どうされました？」

その樺沢蓮司の様子を見て、良助は思わず質問する。

「・・・いえ。多分私の勘違いです。すいません。」

樺沢蓮司は良助の顔を注意深く見ていた。

「そうですか。あ・・・今丁度妻のいるので、呼んできますね。」

良助は、家の中で映画を観ている南を呼び出す。

挨拶をするために南は玄関に向かった。

そして、ドアの前に立っていた男を見た時、南の表情が一気に変化する。

「こちら、新しく隣に越してきた樺沢さん。今日は挨拶に来てくれたみたいだよ。」

南は、不快感を露わにしながら、樺沢蓮司のことを見ようとしない。

「初めまして。樺沢と申します。今日からよろしくお願いします。」

樺沢蓮司は、爽やかな笑顔を見せながら、南に明るく挨拶をする。

「・ ・ 初めまして。良助の妻の南です。よろしくお願いします。」

いつものように明るい南はそこにはいなかった。

かすれたように小さな声で、まるで嫌々樺沢に挨拶をしているような態度だった。

そんな南の態度に、良助は戸惑っている。

「綺麗な奥さんですね。私はまだ独身で独り身なので羨ましいですよ。」

樺沢蓮司は、南のことを見ながら、爽やかな笑顔で良助に話しかける。

「はは。妻のこと褒めてもらえて嬉しいです。南は私の自慢の妻です。」

良助は、嬉しそうに答える。

対照的に南は、無表情で下を向いたまま、樺沢蓮司のことを見ようとしない。

「本当に羨ましいですよ・ ・ ・ あれ？ ・ ・ ・ 」

樺沢蓮司は、話の途中で何かを思い出すように南のことを見ている。

「樺沢さんどうしたんですか？」

その様子に疑問を感じた良助が質問する。

「．．．．いえ．．．すいません。なんでもないです。とりあえず、これからよろしくお願いします。」

樺沢蓮司は、何かを思い出したかのように、不敵な笑顔を見せる。

簡単な挨拶を済ませると、樺沢蓮司は自分の部屋に戻っていった。

「南どうしたんだよ？様子がいつもと違ったけど．．．．体調でも悪いの？」

いつもと様子が違う南のことを心配する良助。

「ん？大丈夫だよ。ごめんね。多分、私の勘違いだと思う。」

そう言うと、南は部屋に戻っていった。

「勘違い？どういうことだろ？良助は意味が分からずに首を傾げた。」

とりあえず、ドアの鍵を閉めて部屋に戻る良助。

部屋に戻った南と良助は、映画の続きを一緒に観ていた。

「あの人が新しいお隣さんか。田崎さんが言ってたような人とは違ってよかったね。ちょっと威圧的だけど。」

内心、本当に反社会勢力のような人間が隣に越してくることに対して良助は恐怖を感じていた。

田崎から聞かされていた話と実際に会った樺沢蓮司の印象は、良助の中ではまったくリンクしていない。

しかし、そんな良助とは対照的に南はまったく違う印象を樺沢蓮司に感じている。

「良助・・・私の勘違いじゃなければ、私達はあの人と会ったことがあるはずだよ。あの人のこと見たことあるって思わなかった？」

南は、樺沢蓮司に対してある疑念を抱いていた。

「え？完全に初対面でしょ。俺は樺沢さんと会ったことがある記憶なんてないけど・・・なんで？」

良助は不思議そうな顔をして南に質問する。

「良太さ、高校1年の時のクラスメイトで黒木蓮司っていたの覚えてる？」

その名前を出した途端、南の顔が少し強張った。

「黒木蓮司？覚えてるよ。あいつのことは忘れるわけないよ。でも、なんであいつの名前が今出てくるの？」

良助と南にとって、黒木蓮司という名前を忘れることはできない。

黒木蓮司とは高校1年生の時のクラスメイトで、南のことを口説き続けていた、あの不良生徒のことだった。

地元でも有名な不良で、父親がヤクザというある意味で悪のサラブレッド。

暴力性と支配欲を持ち合わせている人物であり、誰も黒木蓮司に逆らうことができない。

そんな黒木蓮司に気に入られ、口説かれ続けた南のことを助けたのは、他でもない良助の勇気ある行動だった。

その行動がキッカケとなり、良助は校内で黒木蓮司から激しい暴行を受けることになってしまう。

しかし、結果として良助に暴行をした黒木蓮司は退学処分となり、良助と南の前から姿を消した。

それから、すでに10年以上の月日が経過している。

10年も経過すれば、当時と比較して見分けがつかないほどに外見が変わっていても不思議ではない。

「樺沢蓮司さんって、なんとなくだけど、黒木蓮司に似てるんだよね。雰囲気も。私はあ

いつのことが大っ嫌いだったから、よく覚えているんだけどさ。」

南は、当時のことを思い出し、少し気分が悪くなっていた。

それほど、南の中では黒木蓮司に対しての嫌悪感は未だに根強く残っている。

女好きで軽薄な性格、典型的な不良で自分の思い通りにならないとすぐに周りに暴力を振るう。

まさに南が嫌いな人間像を、そのまま表現したような人物だった。

「まさか・・・名前是一緒だけど、苗字も違うし。それに黒木蓮司ってあんなに綺麗な顔してないでしょ。雰囲気も別人みたいだし。」

良助の中で、樺沢蓮司と黒木蓮司の存在が、まったく一致しない。

記憶の中にいる黒木蓮司は、どちらかという不細工ではないが強面な顔つきで、知的な雰囲気とは真逆の人物だった。

対照的に、ついさっき会った樺沢蓮司は、整った綺麗な顔立ちで、柔らかい口調で知的な雰囲気が強い。

どう考えても、良助の中では、樺沢蓮司と黒木蓮司はリンクしなかった。

「あれから10年以上経ってるんだよ？別人みたいになっててもおかしくないでしょ。」

南の言っていることは、決して間違っていない。

10年も時間が経過すれば、人の外見は本人と気づかないレベルで変わる。

南は、証明できる証拠はないが、樺沢蓮司と黒木蓮司が同一人物であると確信していた。

「・・・それが本当なら、本気で注意しないと。あいつが、そう簡単にまともな人間になるなんて思えないよ。」

南の危機感迫るような表情と言動に、良助も樺沢蓮司と黒木蓮司が同一人物ではないかと疑惑を抱くようになる。

その頃、引っ越したばかりの自分の部屋に戻っていた樺沢蓮司は、予想外の再会に心が躍っていた。

「マジかよ。まさかこんなところで再会するなんてな。あの頃よりもいい女になりやがって。こりゃ楽しい生活になりそうだ。」

樺沢蓮司は、先ほどとはまったく別人のような表情で邪悪な笑みを浮かべた。

そう、南の直感は当たっていたのだ。

樺沢蓮司と黒木蓮司は、同一人物だった。

苗字が変わっていたのは、両親が離婚したことが原因であった。

そして、外見が10年前と別人のようにになっているのにも、明確な理由があった。

樺沢蓮司は、整形をして自分の顔を少し変えている。

整形といっても、一重を二重にして、少し目を大きくする程度の簡単な整形のみ。

元々、整った顔立ちをしている樺沢蓮司には、整形なんてする必要はない。

ただ、少しでも女性からモテるようになるためだけに整形をしていた。

気に入った女性はどんな手を使っても自分のモノにする。

そんな樺沢蓮司らしい発想だった。

しかし、その整形により樺沢蓮司は以前よりも女性からモテるようになる。

学生時代のように周りに恐怖を与えるような鋭くキツイ目は、整形したことにより消滅。

代わりに、綺麗な二重とパッチリとした綺麗な目を手に入れたことで、第一印象がガラリと変化していた。

過去に暴行を加えられた良助ですら、別人と思うほどに。

第2話『半グレに奪われた人妻の唇』

その日から、南と良助は自宅と出る時に警戒して外に出るようになった。

良助は、まだ半信半疑だったが、南の言葉を信じて注意することにする。

樺沢蓮司が隣に住み始めてから、すでに1週間が経過していた。

特に何事もなく毎日が過ぎていく。

出勤時や帰宅時に樺沢蓮司と遭遇することもない。

良助と南は、内心安心していた。

樺沢蓮司が隣に引っ越してきたことにより、自分たちの生活に支障が出ないか心配していた。

ただ、樺沢蓮司が隣に越してきてから何点か変化は起きている。

昼夜を問わず樺沢蓮司の部屋には、スーツ姿の男性が出入りしている。

何をしているのかはわからないが、その光景は少し異様に見えた。

そして、夜中になると樺沢蓮司の部屋から騒音が聞こえてくるようになる。

初めは、男性と女性が騒ぐような音や音楽が聞こえる程度だったので、我慢することができた。

しかし、夜中になると女性が喘ぐような声が聞こえてくるようになった。

良助達が住んでいるマンションは、元々家賃が安いことで有名なマンションだった。

高級マンションと比べて防音対策には弱い作りになっている。

そのため、良助達の部屋の壁越しから、毎晩のように女性の大きな喘ぎ声が漏れ聞こえてくる。

ほぼ毎晩のように夜中に聞こえてくる女性の喘ぎ声に南は気分を悪くしていた。

「樺沢さんとはまだ一度も会ってないけど、あの人って普段何してる人なんだろうね？」

寝室で南に話しかける良助。

「わかんない。でも、やっぱり普通の仕事をしてる人じゃないよね。スーツ姿の怪しい男性が出入りしているし。」

樺沢蓮司の話になると、南は口調が普段よりもキツくなる。

毎晩のように聞こえてくる騒音に南の我慢は限界に達していた。

「やっぱり、田崎先輩の言う通り、反社会勢力なのかな？半グレってやつ。第一印象は良かったんだけどな。」

ふと田崎の話を思い出す良助。

良助の中でも、樺沢蓮司に対する認識はすでに変わっている。

「早く出て行ってくれないかな。私、大家さんに相談してみようかな。騒音も酷いし。たった1週間だけど、もう我慢できない。」

南は、できることなら早い段階で樺沢蓮司に今住んでいる部屋を退去してほしいと思っている。

また住んでから1週間程度だが、南にとって樺沢蓮司の存在は精神的なストレスでしかなかった。

「あんっ・・・はあん・・・すごい蓮司さん・・・ああん・・・」

そんな時、また壁越しに樺沢蓮司の部屋から女性の大きな喘ぎ声が聞こえてくる。

「また聞こえてきた。毎日こんな声聞かなくちゃいけないの？本当に獣みたい。気持ち悪い。」

女性の喘ぎ声を聞いて、南は樺沢蓮司への嫌悪感を言葉に出して露わにする。

「でも女性も声大きすぎじゃない？樺沢さんが凄いのかな？性獣みたいな？」

南としか経験がない良助にとっては、隣から聞こえてくる女性の喘ぎ声は、まさに未知のモノだった。

南は、良助とセックスする時は、小聲で小さく喘ぐ程度。

隣の部屋から聞こえてくるような、大きな女性の喘ぎ声なんてアダルト動画の世界の話だと思っていた。

「私と隣から聞こえてくる声の女なんかと一緒にしないでよ。気持ち悪い。本当に獣みたい。」

隣の女性と比べられた南は少し怒っている。

「あん・・・気持ちいい・・・蓮司・・・はあん・・・」

隣からは、途切れることなく女性の大きな喘ぎ声が良助達の部屋まで聞こえてくる。

「もうっ！私我慢できない。明日、直接樺沢さんに抗議してくる。これじゃあ、寝れないよ。」

そう言うと、音を遮る様に布団の中に入り寝てしまう。

隣からは、止むことなく女性の喘ぎ声が響き渡っていた。

南に言うと怒られると思い内緒にしていたが、良助は隣から聞こえてくる喘ぎ声を密かに楽しみにしていた。

これは、良助が特別というわけではない。

普通の男性なら、このように隣から喘ぎ声がリアルタイムで聞ける状況に興奮しないわけがない。

良助は、布団に入り寝る振りをして、隣から聞こえてくる声を集中して聞いていた。

「はぁ・・はぁ・・おい・・俺の女になりたいか？中に出してやるから素直に言ってみろよ。」

今度は、女性の声だけでなく、樺沢蓮司の声も聞こえてくる。

「あん・・蓮司の女になりたい・・中に出して・・あん・・」

アダルト動画の世界でしか聞けないような刺激的な言葉が、隣から聞こえてくる。

良助は、その声を聞きながら自分の性器を触っていた。

「中にたっぷり出してやるからな。妊娠させてやる。俺の子供が欲しいって言ってみろ」

樺沢蓮司の刺激的な言葉が聞こえてくる。

「あん・・出してえ・・蓮司の子供が欲しいの・・妊娠させて・・あんっ・・」

本当に隣でアダルト動画の撮影が行われているのではないか？

本気で疑うような刺激的な言葉が飛び交っていた。

良太の性器は、普段とは比較にならないほど勃起して硬くなっている。

「ああ・・出すお・・これでお前は俺の女だ・・ああ・・イクっ・・」

「あん・・蓮司・・ああん・・はん・・」

このやり取りを最後に、隣から声は聞こえなくなった。

良助は、南の方をチラチラみながら自分の性器を触っている。

興奮が治まらなかった。

南に気づかれないように寝室を抜け出しトイレに駆け込んだ。

「はあ・・はあ・・なんだよあれ・・あんな声聞かされた、普通に寝れないよ。」

興奮が治まらない良助は自分の手で性器を擦り慰めている。

射精してスッキリして寝室に戻ると、南は両耳を自分で塞いで布団の中に入り込んでいた。

「あん・・・もうだめ・・・んあ・・・」

隣からは、また女性の喘ぎ声が聞こえてきている。

ついさきほど行為を終えがばかりだが、どうやら2回戦が始まっている状況のようだった。

「もっと俺で感じろ。お前の体と心は、もう旦那じゃなくて俺のモノだからな。」

聞こえてくる内容から、隣ん部屋で樺沢蓮司に抱かれている女性は人妻のようだった。

「はんっ・・・すごい・・・もう私の心と体は蓮司だけのモノだから・・・あん・・・ん・・・」

嫌でも聞こえてくる喘ぎ声と刺激的な言葉を、南は耳を両手で塞いで必死に耐えている。

「南大丈夫か？もし耐えられないなら他の部屋で寝ようか？」

南のことが心配になり声をかける良助。

「ちょっと気分悪い。変な声聞いてたら吐き気がしてきた。ちょっとトイレに行ってくるね。」

そう言うと、南はトイレに駆け込んだ。

隣の部屋からは、まだ樺沢蓮司と人妻らしき女性の声が響き渡っている。

「ああ・・・こんなの初めて・・・あん・・・蓮司・・・はあん・・・」

先ほどよりも女性の喘ぎ声が大きくなっている気がした。

「もうお前は俺から離れられねえよ。旦那とは別れろよ？わかったな。」

壁際から聞こえてくる声だけでも、樺沢蓮司が独占欲と支配欲が強い人間であることがよくわかる。

「本当にやばいな。樺沢さんは奪略系や寝取り系の性癖の持ち主なのか？」

発言の内容から、樺沢蓮司は奥手で気弱な良助とは真逆のタイプであることがわかった。

そして、良太は2回戦の突入しても、衰える様子が見られない樺沢蓮司の精力の強さに驚いていた。

自分なら、1回射精しただけで、しばらく勃起することができない。

早漏体質な良助には、長時間の行為は不可能。

樺沢蓮司の獣のような精力の強さに良助は驚いていた。

「あん・・旦那とは別れる・・はあん・・蓮司が欲しいの・・ああん・・」

隣から聞こえる喘ぎ声は、鳴りやむことなく良助達の寝室に響き続けた。

しばらくすると、トイレに籠っていた南が寝室に戻ってくる。

「気分は大丈夫？まだ隣から声が聞こえるから、違う部屋で寝ようか？」

戻ってきた南は、顔色が白く明らかに体調が悪そうだった。

「お前はもう俺の女だ。また全部中に出すからな。あああ・・絶対孕ませてやる。イクぞっ！」

そんな南のこと、まるで挑発するように隣の部屋から卑猥な声が響く。

タイミング悪く、隣の部屋から樺沢蓮司の絶頂に達しようとする声が響き渡る。

「もう限界。明日、私が直接樺沢さんに抗議してくる。」

そう言うと、南は再びベットの中に潜り込み無理やり寝ようとした。

幸いなことに、この日は2回戦だけで行為は終えたのか、隣の部屋から卑猥な声が聞こえることはなかった。

次の日、良助は日勤だったため、朝早くから出勤しなければいけなかった。

「じゃあ、行ってくるね。南、本当に一人で抗議しに行くの？仕事が終わってからでいいなら、俺も一緒に行くよ？」

結局、短時間しか睡眠をとることができなかった良助と南は、寝不足気味の状態だった。

樺沢蓮司が隣の部屋に越してきてから、以前のように満足に睡眠が取れずにいる。

ほぼ、毎日のように部屋から聞こえてくる騒音に精神的にも追い詰められていた。

「うん。大丈夫だよ。ちょっと気を付けてもらうように言うだけだから。喧嘩なんてするつもりもないし。」

寝不足の為か、南は普段よりも少し元気がない。

「そっか。わかった。でも、絶対に無理しないで。身の危険を感じたら、すぐに逃げるんだよ。俺にもすぐに連絡して。」

良助は、本気で南のことを心配していた。

田崎の話が本当であるなら、樺沢蓮司の正体は、反社会勢力に属している人間。

そして、もう一つの疑惑である、樺沢蓮司=黒木蓮司という説。

もし、この2つの内1つでも真実だった場合、南の身に危険が及ぶ可能性も十分考えられる。

しかし、現実には良助が想像している以上に最悪だった。

樺沢蓮司の正体は、学生時代に良助に暴行を行い、南のことを口説き続けた黒木蓮司であった。

そして、樺沢蓮司は反社会組織に属しており、いわゆる半グレと言われる類の人間でもある。

この事実にもっと早く気づいていれば、南と樺沢蓮司を接触させることはなかった。

「わかった。ありがとう。何かされたら、すぐに良助に連絡するね。お仕事頑張ってるね。」

そう言うと、南はいつものように良助に優しくキスをした。

南からキスされると、良助は少し照れながら嬉しそうに出勤した。

出勤する良助を見送ると、南は一度部屋の中に戻った。

簡単に部屋の掃除をして、着替えて樺沢蓮司の部屋に向かった。

目的は、日々続き騒音への抗議のためである。

樺沢蓮司の部屋の前に立つと、深呼吸する南。

部屋の奥からは、夜中のように騒音はなく、物音ひとつしない。

南はの心臓の鼓動は、どんどん早くなっていく。

ピンポン ピンポン

南は高鳴る鼓動を抑えてインターフォンを押した。

ガチャッ

ドアが開き、南の目の前に樺沢蓮司が現れた。

「この前はどうも。今日はどうされましたか？」

身長185cm前後で筋肉質な体格の樺沢蓮司に圧倒されそうになる南。

改めて近くで見ると、やはり学生時代に大嫌いだった黒木蓮司の面影を感じた。

「突然すいません。実は、ちょっと改善していただきたいことがありまして・・・」

南は、樺沢蓮司の威圧的な態度と学生時代の記憶が蘇っていた。

「はぁ？なんの改善ですか？俺が何か迷惑かけましたかね？」

樺沢蓮司は、何も身に覚えのないような態度を取っていた。

引っ越しの際に挨拶に来た時とは、別人のような態度だった。

「あの・・・騒音が酷いので、改善していただきたいです。私たちの寝室まで騒音が聞こえてくるので・・・」

南は、樺沢蓮司の威圧的な雰囲気には飲まれそうになりながらも、冷静に抗議した。

「騒音・・・そんなに俺の部屋から音が聞こえますか？具体的にどんな音ですかね？」

樺沢蓮司は、本当にわかっていない様子だった。

「ほぼ毎晩聞こえてきます。具体的にどんな音って・・・言わなくてもわかりませんか？」

さすがに夜中に女性の喘ぎ声が聞こえてくるなんて南の口からは言えなかった。

樺沢蓮司は、南の言葉を聞いて、騒音の原因がなんなのか気づいた。

「ああ・・なんとなくわかりました。聞こえてたんですね。お恥ずかしい。気づきませんでした。本当に申し訳ない。」

樺沢蓮司は不敵な笑みを浮かべて、ニヤニヤしながら南に謝った。

明らかに反省をしておらず、言葉だけの謝罪であることを南はすぐに理解する。

「いえ、今後改善していただければ問題ないです。よろしくお願いします。」

溜まっていた樺沢蓮司への不満と怒りを抑えながら冷静に話して大人の対応をする南。

改善してほしいことだけ伝えて、足早に帰ろうとする。

「ちょっと待ってくださいよ。南さん。」

そんな南を樺沢蓮司は声をかけて引き留めようと声をかけた。

「はい？なんですか？」

南は、冷たい口調で樺沢蓮司に質問した。

樺沢蓮司のことが嫌いだからというだけが理由ではない。

自分の名前を馴れ馴れしく呼ばれたことで、南は一瞬にして苛立つを募らせてしまう。

「どこかで会ったことあると思ったんですけど、南さんって北坂高校に通ってませんでしたか？」

その問いかけに、一瞬南は言葉を失ってしまう。

確かに南が通っていた学校の名前は、北坂高校で間違いない。

しかし、なぜそのことを樺沢蓮司が知っているのか？

一瞬にして南の頭の中はパニックになった。

少し間を置き、冷静に考えると、1つの答えが南の中に浮かんできた。

初めて会った時に感じた自分の直感である樺沢蓮司=黒木蓮司という可能性。

樺沢蓮司の質問で、その可能性が確信へと変わった。

「はい？そうですけど、なんでそのことを樺沢さんが知っているんですか？初対面のはずですが。」

南は、様子を伺うように適当な返答をする。

「やっぱり。なんか見たことがあると思ったんだよな。俺のこと覚えてない？黒木蓮司だよ。今は親が離婚した関係で苗字が変わってるけどね。」

目の前の男が楽しそうに話すその言葉を聞いて、南の目の前は真っ暗になった。

やはり、自分の直感は間違っていなかったと確信する。

「え？・・・黒木君？」

どのようなリアクションをすればよいかわからず、南は曖昧な返事をしてしまう。

「やっぱり南ちゃんだったんだ。相変わらず可愛いね。まさか、こんなところで南ちゃんに再会できるなんて思わなかったよ。」

動揺する南とは対照的に、樺沢蓮司は南との再会を喜んでいる。

何も悪びれることなく、まるで過去に何もなかったかのような態度だった。

「・・・よくそんなに普通に私に話しかけられますね。あの時、黒木・・・樺沢さんが私達にしたこと、まだ忘れてませんから。」

南は、そんな樺沢蓮司の態度を見ていて、少しずつ過去のことを思い出し怒りが湧いてくる。

南は、樺沢蓮司の睨みつけながら、冷たい口調で言い放つ。

「何そんなに怒ってるの？俺が南ちゃんに何かした？しつこく口説き続けたくらいしか記憶にないな。まあ、あの時は、まったく相手にされなかったけどね。」

樺沢蓮司の記憶の中では、南に対しての罪悪感は皆無だった。

しかし、南が樺沢蓮司に対して怒りを感じている理由は、自分では良助に対しての暴行だった。

良助に対して、腹いせのように激しい暴行を加えてことを、目の前の男はすでに忘れていたような態度を取っていた。

「あなたが私のことを口説いていたことなんてどうでもいいの。それよりも、謝らなければいけない相手がいるでしょ？」

樺沢蓮司に思い出させるような言い方で問い詰める南。

「俺が謝らなければいけない相手？誰だろ・・・思い当たる節が多すぎてわからないな。」

樺沢蓮司は、本当に南が誰のことを言っているのかわからない様子だった。

「同じクラスだった良太って覚えてる？私の隣の席だった田中良助のことよ。」

南は、こみ上げる怒りを抑えることができずに、少し声を荒げてしまう。

「田中良助・・・思い出した。あの地味なおタク野郎ね。忘れてないよ。俺はあいつのせいで、学校を退学になったんだからな。」

樺沢蓮司は、自分が被害者であるような言い方をしている。

「何なの？その言い方・・・学校を退学になったのは、自業自得でしょ。良助が悪いような言い方はやめて。」

反省するどころか、良太への謝罪もなく、逆に馬鹿にするような言動をされ怒りを露わにする南。

「そんなに怒るなよ。まあ、ここじゃなんだから、とりあえず中に入れよ。詳しく聞いてやるから。」

樺沢蓮司は、自分の部屋の中に南を招き入れようとしていた。

「・・・・・・ここでいいです。なんであなたの部屋に入らなきゃいけないの。」

危険性を察知して樺沢蓮司の部屋に一人で入ることを避けようとする南。

「ここじゃ近所の人目もあるだろ。今の南ちゃんは、ちょっと感情的になって声が大きいし。それに俺も詳しく話聞きたいんだよ。当時の記憶はあるけどさ、曖昧で忘れてる部分も多いから。」

それらしい理由を付けて、自分の部屋に南のことを引き込もうとする樺沢蓮司。

「私に何か変な事したら、本当に訴えます。私の話が事実であると認めて謝罪してください。」

南は当初の目的である騒音の改善よりも、過去の行いを謝罪させようと意地になっていた。

目の前の男に、どうしても直接良助に謝罪をさせたかった。

最愛の夫である良助に、一方的に理不尽な暴力を振るった目の前のこの男に・ ・ ・ ・ ・

「変なことはしないよ。南ちゃんの話聞いて、事実ならちゃんと謝罪するよ。約束する。」

結局、南は誘導されるように樺沢蓮司の部屋に足を踏み入れてしまう。

「さあ、遠慮しないで入ってよ。まだ引っ越してきたばかりだから、荷物の整理が終わってないけど。」

樺沢蓮司の部屋は、高級な家具やお洒落なインテリアに囲まれた、不思議な空間になっていた。

南と良助と同じ間取りとは、思えないような印象を受けた。

事務所として使っている部屋なのだろうか？

大きなテーブルには、業務用に使うようなパソコンが10台置いてあった。

なぜか10台以上の携帯電話が無造作にテーブルの上に置かれている。

部屋はタバコの匂いで充満しており、大きな金庫も置いてある。

テーブルの上には、個人情報に記載されている書類や札束も無造作に放置されている。

どう考えても、まともな商売をしている人間の事務所ではない。

この異様な光景に南は、良助の先輩の田崎の言葉を思い出す。

樺沢蓮司は、反社会勢力に属している人間である可能性がある。

樺沢蓮司と黒木蓮司が同一人物であることがわかった瞬間から、この情報の信憑性は南の中で一気に高まった。

元々親はヤクザであり、樺沢蓮司自身も地元で有名な不良。

当然、そのまま更生せずに大人になれば、反社会勢力の一員になるのは必然だった。

南は、普段は応接室として使っている部屋に通される。

高級そうなソファに座ると、樺沢蓮司は南の正面に座り込んだ。

「じゃあ、さっきの話の続きをしようか。どこまで話したっけ？」

反省をする様子もなく、南に質問する樺沢蓮司。

「まずは、毎日私たちの部屋まで聞こえる騒音を改善することを約束してください。」

行為中の喘ぎ声であることは、さすがにハッキリ言うことはできなかった。

「ああ。それは気を付けるよ。声が隣まで聞こえてるなんて思わなくてさ。興奮すると激しくしちゃうんだよな。」

まるで南の反応を伺うかのように、さりげなく下ネタを混ぜる樺沢蓮司。

「・・・今後は、卑猥な声を私達の部屋まで聞こえないように配慮してください。気分が悪いです。」

南は、嫌悪感をむき出しにして、まるで汚物を見るような目で樺沢蓮司のことを睨みつける。

「それともう1つ言ってなかった？ついさっき話していた内容・・・もう忘れちゃったよ。」

まるで、南のことを挑発するような発言だった。

「良助のことです。彼に暴力を振るったことを、直接謝罪してください。私は今でもそのことを許していません。」

南は、力を込めて樺沢蓮司に言い放つ。

普段の南とは思えないような陰しい表情をしていた。

「ああ。それだ。良助のことか。でも、なんで南ちゃんが良助みたいなキモオタの肩を持つんだよ？」

樺沢蓮司は、南の目の前で良助のことを馬鹿にするような言動を平気で繰り返す。

「良助は、今は私の夫なんです。この前、一緒に挨拶したはずですよ。それに良助のことを悪く言うのは止めてください。」

南は声を大きくして樺沢蓮司に対して怒りを露わにする。

目の前に座っている樺沢蓮司は、驚きを隠せない表情をしていた。

「は？マジかよ。あのオタクが南ちゃんみたいな美人の旦那？あり得ないだろ。選ぶ男間違えてるでしょ。」

樺沢蓮司は、一切反省することなく、南の前で良助のことをさらに馬鹿にするような発言をする。

客観的に見れば、南ほどの美人であれば、世間一般で言うところのハイスペックな男性と結婚することも難しくない。

良太のように、外見は地味で、収入も低く、気弱な性格と正直良い所が無い男性と南は明

らかに釣り合っていなかった。

「良太は私のことを世界一大事にして愛してくれています。良太に謝ってください。」

良太のことを見下すような発言を繰り返す樺沢蓮司のことを睨みつける南。

「悪かったよ。南ちゃんみたいな美人と結婚した良太が羨ましくてさ。つい嫉妬しちゃったよ。」

南の表情を見て、樺沢蓮司は反省した素振りを見せる。

「学生時代にあなたが良太に暴力を振るったこと、良太に直接謝罪してください。」

南は樺沢蓮司に対して良助への謝罪を強気な態度で要求する。

「わかったよ。良太にはちゃんと謝るよ。でもさ、いくら南ちゃんでも態度が悪すぎない？俺にそんな態度を取れるのは南ちゃんくらいだよ。」

樺沢蓮司の表情と態度は一瞬にして豹変する。

その威圧感に南の体は恐怖で硬直してしまう。

先ほどまで南に見せていた樺沢蓮司の顔はあくまで偽りの表の顔。

今南に見せているのが裏の顔であり、半グレとして生きている樺沢蓮司の姿だった。

「なんだよ？急に黙り込んで。そんな可愛い態度見せられちゃうと、無理やり良太から奪いたくなっちゃうじゃん。」

そう言う、樺沢蓮司は、恐怖で体を動かすことができない南の隣に移動した。

俯く南の顔を手で力づくで持ち上げて、南のことを至近距離で見つめる。

そして、強制的に突き出すような恰好にされた南の唇を指でイヤらしくなぞる樺沢蓮司。

恐怖心からなのか、南はその行為を拒絶することができない。

「学生時代から全然変わらないな。マジでいい女だね。気に入ったよ。俺の女にしてやる。」

南のやわらかい唇は樺沢蓮司の男らしい唇に吸い込まれていった・・・・・・